



NPO法人 大阪環境カウンセラー協会
副理事長
地球環境関西フォーラム
戦略部会・循環社会部会委員
大学講師等
(近畿大学、大阪産業大学、鳥取環境大学等)
CEAR登録 環境主任審査員

よしむら たかし
吉村 孝史 氏

CSRレポート発行の2年目を迎え、関西ティーイーケイ(株)としての一つの形ができつつあることが、実感されます。CSRは「企業の社会的責任」であり、「持続的発展(サステナブルディベロップメント)」という考え方が求められるということです。

トップコミットメントにおいて、社員全員へ「CSRが最優先である」ことを意義付けし、持続的発展を目指して「事業拡大とCSRは車の両輪である」と考えていることは、力強いものを感じます。企業は一時的にどれほど発展しても持続していかなければ意味がありません。どのように発展と持続性を両立させるかが重要です。CSRレポートの第2号が発行された意味は、ここにあります。

第1号を発行するのは技術的には大変な困難が伴いますが、初めてやるという精神的な高まりがあります。しかし、その気持ちはいつまでも続くものではありません。持続させるための仕組み作りが無くてはなりません。その仕組みがこのレポートに見られるかどうか、ポイントです。そして、第1号を発行しての社内外の評価が、どうであったのかが重要です。社内については、職場ごとに計画的に読み合わせをするなど、全社員に定着を図っていますが、社外についてはどのような人にお届けして、その評価はどうだったのかをしっかりと分析することが必要です。

さて、地球環境問題は3つの側面があります。①低炭素社会を目指す温暖化対策 ②循環型社会を目指す資源循環対策 ③自然共生社会を目指す生物多様性対策です。

①については、省エネ活動はもちろんのこと太陽光発電についても触れられています。また、今回よりCO₂排出量の表示がなされていることは評価できます。さらに全体の電力消費量と太陽光発電量との比較

の表示について、工夫の余地があります。

②については、廃棄物削減や紙の削減で目標達成するなど、成果を上げています。

③自然共生の分野では、今回「びわ湖トラスト」との関わりが取り上げられていることは、評価できます。

また、法令遵守・企業倫理・安全・防災・人権・人財・リスクなどについて、できるだけ計画を立て実績を数値でフォローし、さらにVoiceで現場の実態を伝えるというマネジメントシステムの考え方が、定着しつつあることは、評価できます。

特に、2015年5月に機器事業本部がISO9001の認証を取得したことは、特筆すべきことです。日刊工業新聞などマスメディアで取り上げられたこともステークホルダー(利害関係者)とのコミュニケーションとして、好事例となっています。

排水に関しての2件のヒヤリハットの発生が取り上げられていることは、情報公開の事例として評価できますが、再発防止策などについて、より具体的に記すことが必要です。

女性リーダー研修がスタートして女性が活躍できる風土作りは有効と考えられますが、2016年4月より女性活躍推進法が施行され、より一層の充実が求められます。

さらに労働安全衛生法改正も施行段階に入っています。今後は単に法令遵守と言うだけでなく、より具体的に法令改正対応(例えば、PCB廃棄物処理特別措置法やフロン排出抑制法など)も記す必要があります。

2年間の経験を通じて、関連データがそろってきアンケートも分析されています。CSRの実態把握がより進んできたことが、感じられます。また仕組みとして、CSR責任者の明確化も評価できます。特に『CSRレポート2015』が商談につながったと紹介されていますが、まさにCSRと経営の一体化の良い事例です。

最後に述べることは、CSRの実態は良く分かるようになったということに止まらず、これからどうするのかという視点です。COP21では2030年、2050年を念頭において、議論がなされています。そんな先のことは誰も分からないと言われるかも知れませんが、「こうしたい」ということは言えます。そんな世の中の流れだということを、少しでも汲み取って表していただきたいものです。

第三者意見を受けて

今回の発行にあたって、吉村様には第1号に続いて、第三者意見を執筆いただき、ありがとうございました。第2号の発行で、CSRレポートを通した当社のCSR活動の発展と持続性を第一番にご評価いただいたことを嬉しく思います。

今回のレポートは、当社事業紹介にページを割きすぎているとの前号のご指摘を踏まえて、当社のCSR活動の実践状況を報告することに注力いたしました。Voiceコラムを活用して、できるだけ多くの関係者の声でCSRの具体的な取り組みを伝えるように工夫しました。また、第1号ができ上がった時点ではCSRに対する当社従業員の理解が必ずしも十分とは言えない状況で、社長の「従業員一人ひとりにへの徹底」指示を受けて、1年間かけて各職場ごとに読み合わせを行い、CSR意識の醸成に努めました。また、CSRレポート発行をPRしたところ、ご興味をお持ちになったお客様との商談につながるといった思いがけない成果

もありました。これらの点も第三者意見で高く評価いただき、CSRと経営のよき連携を社内外に示すというCSRレポートの効用を果たせたことが今後の励みとなりました。

一方で、地球環境問題に対する取り組みには、法令遵守を含めて改善の余地があるとのこと意見をいただきました。当社は建設業という業態柄、事業における環境影響が小さく、経営側からの注目度が低いことは否めません。企業の地球環境面への社会貢献に対して世間の関心が極めて高いことを慮ると、CSRレポートでの「見える化」をさらに工夫すべきと考えています。

第2号の発行に漕ぎつきましたが、ようやくレポートの「箱モデル」ができ上がったところと認識しています。今後はさらなるCSRの実践によって、中身の詰まった「角砂糖モデル」に作り上げていく所存です。CSRを基本とする経営で、企業の社会的責任である持続的発展を実践する当社の姿を示すべく、号を重ねてまいります。



関西ティーイーケイ株式会社
取締役
管理・調達部門長兼
TPM推進室長

かどつじ あきら
角辻 明